

## 夢と現実の世界

明治二十三年の初夏、北陸の金沢で、浅野川の辺にある日本情緒に満ちている街。街では、日本の伝統的な様々な見世物が演じられている。これは昭和八年に上映された溝口健二の映画『滝の白糸』で、最初のシーンに撮られる風景である。設定ショットである人形劇の舞台から、カメラはだんだんと動き始める。右にパンし、店を出てから、街を散策する。日本の絵画などといった伝統的なもの、行ったり来たりしている人たちが映される。さらに、カメラはある店の看板「水芸師、滝の白糸」をクローズアップし、店のれんを開き、劇場に入り込む。そして、後ろの観客席から、見世物をふるまっている芸人に近づき、舞台の裏にある楽屋の様子を撮る。そこに、白糸が盛装して登場する。この最初のシーンでは、ロング・テイクを使うことによって、映画が観客たちを昭和八年から明治時代に連れ戻す。カットされずに、撮られているこの夢のような明治風景は、我々の前に連続的に流れ出ている。とともに、映画の物語も展開し始める。

『滝の白糸』は悲しい恋愛物語である。女性の水芸師白糸は、御者である欣弥の勉強を支え、学費を仕送り続けているが、金の問題で殺人罪を犯し、自殺することになる。現実の中で、水芸人である運命にとらわれる白糸は、心の奥で自由と恋愛を求めている。その自由と恋は、彼女にとって、果かない夢である。が、欣弥の出現によって、その夢が叶うと白糸は信じている。しかし、残酷な現実を追われて、白糸の夢への希望は、かえって夢を壊してしまう。映画の最後では、白糸は殺人罪のため、自由を失い、自分の夢が破れる。彼女は自殺することに決める。運命から逃れられず、これほど小さな夢も叶えられず、残酷な現実の中で、白糸は犠牲者になっている。白糸から、我々はその時代の女性の運命がよくわかるだろう。ラストシーンは、また観客を、夢のような舞台である明治時代から、今の時代に連れ戻す。『滝の白糸』は、夢と現実の間に生きている白糸の悲劇の恋愛物語を通して、今の時代の中で、運命に翻弄される女性の悲しい現実を、観客に強く訴えかけている。

白糸と欣弥の初会は印象深いシーンである。映画の最初のシーンで、登場する白糸のフラッシュバックによって、二人の初会のシーンが現れる。高岡から、馬車に乗り、金沢へ向かう白糸たち。彼女たちの乗る馬車は、人力車と競走しているうちに、壊れてしまう。時間に遅れないようにするために、白糸は欣弥に無理やり馬車から降ろされ、馬に乗せられる。この一連の行為に驚いた白糸は、欣弥に深い印象を受ける。縄から離れ、自由に走り出すことができる馬のように、白糸も自由を味わうことができるだろう。自由があまりない芸人の白糸には、これはまるで夢のような体験である。回想にふけている彼女の微笑むシーンと同時に二人の出会うシーンが相互に撮られる。この繰り返しによって、夢に夢中している白糸の小さな幸せも我々に伝わってくる。欣哉と一緒にいる時、自由を体験できる白糸は、自分の夢を持つようになってくる。

また、白糸と欣弥の再会のシーンは夢のようである。昼間のにぎやかさが消える夜は、芸人たちにとって、限られた自由の時間である。欣弥と会いたいという願いが叶えることは、夢のようなことだと白糸は思っている。二人の再会のシーンでは、ロング・テイクの使用によって、ロマンチックな雰囲気が作られる。まず設定ショットで、全景が撮られる。橋の下に立っている白糸と橋の上で寝ている欣哉、また、空に浮かんだ月、静かな湖。一枚の水墨画が観客の前に提示される。そこで、白糸は右側へと歩いていき、スクリーン上から消える。しばらくして、彼女はまた、右側からスクリーンの中に入り、橋の上に現れる。ここで、カメラは少しずつ、橋の上に近づき、二人の顔をクローズ・アップする。

月の光に照らされる欣弥の顔をパンしてから、カメラは右に動き、白糸の後ろ姿を撮る。人物と自然風景が一体となり、お互いに溶け込んでいる。観客は思わず、その時間と空間の中に連れ込まれ、現実を忘れるだろう。欣弥との再会によって、白糸は欣弥が自分の夢をかなえてくれると信じ込んでいる。欣弥と離れた後、仕送り続ける白糸はいつか、出世して立派になる欣弥の妻になることを夢見ている。

しかし、女性は残酷な現実にとらわれてしまう。結局夢から目覚めて、現実に戻らなければならない。例えば、白糸は岩淵から、借金を取り戻すシーンがある。冬になると、客がだんだん減り続け、見世物師たちは、金が稼げなくなり、厳しい状況に追われる。白糸は仕方がなく、岩淵から借金を求めるが、彼と揉めている途中で、思わず彼を殺してしまう。このシーンで、再びロング・テイクが使われる。白糸と岩淵の葛藤が連続的に撮られることによって、白糸が現実の世界でもがく姿が暗示される。このシーンは、白糸が岩淵を探しまわっているところから始まる。カメラは白糸と同じスペースで、彼女の後ろ姿を撮る。観客たちも彼女と同じ気持ちで、早く岩淵を見つけたくなるだろう。そうして、奥の部屋に近づくと、横になっている岩淵が待っている。突然岩淵に襲いかけられ、引きずられる白糸は、もがんでいる。ショットの切らないワン・シーンの中で、二人のもめごとの激しさが表される。ここで、白糸は果たして、どうなったのかと観客は関心を持つようになってくる。最後、白糸は、人殺しという目の前の現実に、夢をつぶされる。夢への執着は、結局彼女を苦しい現実に追いつめる。夢の破滅も悲しい運命を暗示する。この悲しい運命は、ラストシーンでは、法廷で自殺を選択する白糸の結末になっている。

運命に翻弄されている白糸は、最後には自由を失い、夢が潰れてしまう。欣弥との最後の出会い、つまり法廷での出会いは、白糸には夢といえ、現実とも言える。なせならば、最後欣哉と会うことができ、しかも検事になっている欣哉の立派な姿が見られて、悔しいことは何もないと白糸は思っている。とともに、殺人者である自分の現実を受け入れなければならない。映画全体をみると、毎回欣弥と出会う時、白糸は夢の世界に生きている。それは、欣哉と一緒にいるとき、白糸は、自由、恋愛への願望が叶うと信じているからだろう。しかし、最後に、彼女は現実の世界に連れ戻され、女性の芸人としての運命と闘いながら、生きていくしかない。

『滝の白糸』は、観客を、夢のような明治時代に連れ入れ、一人の女性の夢と現実の間に生きる物語を通して、女性の悲しい運命を訴える。この意味では、上映された時代に生きていた人々に、いまだに女性の悲しい運命が変わらないという事実気づかせたいとの溝口健二の意図を、我々はどうかがうことができるだろう。